六ヶ所村立郷土館　　企画展

縄文美子がいた 4,000 年前の世界

～謎多き縄文時代後期の姿に迫る～

自然豊かに恵まれた六ヶ所村には、先史時代からの遺跡があり、昭和５０年代には「むつ小川原開発」により多くの遺跡が発掘された。今回は、縄文時代後期の弥栄平遺跡から発掘された甕棺土器の人骨を基に縄文の女性が復元され、当館のイメージキャラクターに採用されている「縄文美子：じょうもんよしこ」が生きていた約 4,000 年前の縄文の世界を紹介する企画である。後期は、世界文化遺産で有名な青森市三内丸山遺跡が寒冷化によって衰退した後の時代で、六ヶ所村に新たに出現する大集落の謎に迫る企画でもある。

縄文時代後期（約 4,100 年前～3,000 年前）
「集落が分散化　社会構造や精神文化の変容期」

縄文時代中期の後半から気候は寒くなり、海退現象が進む。青森市三内丸山遺跡や六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡 A 地区（国道３３８号バイパス）などの円筒土器文化圏の大集落は衰退・分散化していった。しかし、六ヶ所村では、富ノ沢(2)遺跡 C 地区（日本原燃 PR センター）や弥栄平(2)遺跡など、新たな集落が形成され、後期を代表する大石平遺跡や、上尾駮(2)遺跡などの大集落が出現する。環状列石や配石遺構、墓域における木柱群、石棺墓や甕棺、漆文化や漁具、祭祀具などが発達する。縄文時代後期は、集落や墓のあり方、社会構造や精神文化など縄文文化の大きな変容期である。

【主な遺跡と出土物】

（1）幸畑(1)遺跡「集落が分散化」

竪穴住居跡 3 軒、土坑 5 基

（2）　弥栄平(2)遺跡
「弥栄平(2)式が設定される」

後期の十腰内Ⅰ式土器の成立を考えるうえで貴重な資料。

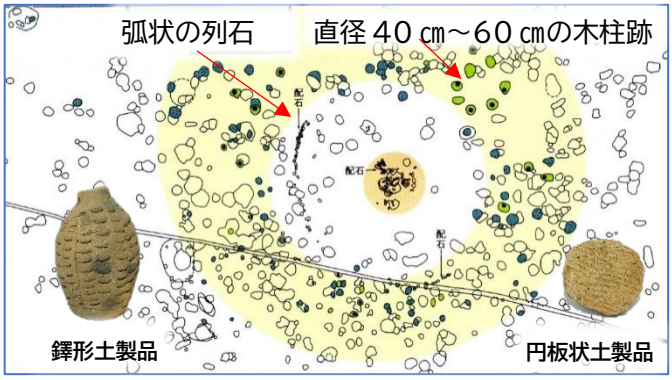
甕棺と縄文人の骨
弥栄平(1)遺跡

（3）大石平(1)(2)遺跡「祈りの場？」

湧水地点南側に、中央に配石遺構を有する広場の外側に 12m 幅で、円形にめぐる御柱穴やフラスコ状土坑群が十腰内Ⅰ式期に形成される。竪穴住居跡 49 軒・土坑 776 基・配石遺構 18 基・屋外炉 6 基と多数御柱の穴（トーテムポール）。出土遺物 198 点が、国の重要文化財に一括指定される。

手形足形土製品

赤漆彩色切断土器



大石平(1)遺跡　木柱群と孤状の列石並びに配石遺構図　県史より

（4）上尾駮(2)遺跡「墓と木柱の縄文広場と大集落」

上尾駮(2)遺跡　集落と木柱が立ち並ぶ墓域の想像図

竪穴住居跡 78 軒・屋外炉 24 基・土坑 395 基・配石遺構 54 基・埋設土器 5 基・焼土遺構 7 基・**数十本の木柱穴**。切断壺、石刀・円板状石製品・石冠・ヒスイ製垂飾品・加工痕のある水晶、足付土板・土偶・耳飾り・鐸型土製品・靴型土製品・キノコ形土製品・土冠・動物形土製品・土器片利用土製品が多数出土。

（5）ヒスイの垂れ下がり

ヒスイの大珠

縄文時代中期から晩期までの３㎝以上の玉（大珠）は、北陸地方に次いで本県が多く出土していて、特に上尾駮(2)遺跡からは、４個集中して出土している。

（6）発茶沢遺跡「落とし穴 665 基出土」

中期から後期初頭にかけての溝状土坑（落とし穴）が 665 基出土している。地形がゆるい下り坂で細長い地形から、シカなどの動物を追い込むには、最適な地形に見える。対岸の富ノ沢遺跡や大石平遺跡、上尾駮遺跡の大集落の人々の狩場だったか。

落とし穴を利用しての狩りの様子（想像図）

溝状の落とし穴群

六ヶ所村立郷土館　　企画展

縄文美子がいた 4,000 年前の世界

～謎多き縄文時代後期の姿に迫る～

世界文化遺産で有名な青森市三内丸山遺跡などの円筒土器文化圏が、寒冷化によって衰退していく。その後、六ヶ所村に新たに大集落が出現する。その大集落跡から出土した土器の多くは、東北南部の影響を強く受けている。文字の持たない当時の縄文人の生活文化を推し量るものとして、縄文人が祈りにも近い思いでつくられた土器や土器の文様から、縄文人の生活文化の変遷を少しでも明らかにしたく企画した。

【土器と土器の文様の変遷】

1　大木１０式併行土器　弥栄平(2)遺跡　中期最終末
「東北南部の影響を強く受けた土器」

口縁部の粘土紐による装飾や刺突文、胴部の J の文字の磨消縄文が特徴で、この磨消縄文は、縄文時代中期最終末（約４，１００年前）に東北北部に伝わる。円筒土器文化圏が衰退し、東北南部の大木式土器文化の影響を受けた新たな集落が出現する。

大木 10 式併行土器

2　門前式併行土器　弥栄平（２）遺跡　後期初頭
「中期の大木式土器の文様を受け継いだ土器」

口縁部のボタン状の貼付文と粘土紐への刺突文、胴部のクランク文の他に J の字や S 字などのアルファベット文字のすり消し模様がつくのが特徴である。東北南部の門前式土器と類似し、東北南部の影響を受けている。

門前式併行土器

3　牛ヶ沢・韮窪式土器　沖附(2)遺跡　後期初頭
「十腰内土器に受け継がれる文様をつけた土器」

口縁部の粘土紐に三角や孤状の文様、胴部に渦巻や三角区画文の磨消縄文がつくのが特徴である。その後の弥栄平(2)式土器や十腰内土器につながっていく。狩猟文土器も同じ時期の土器である。

牛ヶ沢・韮窪式土器

4　余市式系煉瓦台式土器　沖附(2)遺跡　後期初頭
「北東北では珍しい、沈線文がない土器」

沈線文がなく、土器一周に貼り付ける粘土紐と全体に施す斜縄文が特徴である。北海道における大木式土器文化の影響を受けた土器といわれており、東北南部の土器文化圏との、津軽海峡を越えた交流があったことが考えられる。

余市式系煉瓦台式土器

5　弥栄平(2)式土器　弥栄平(2)遺跡　後期初頭
「六ヶ所村の地名がついた重要な土器」

上半部の沈線文や磨消縄文で三角形を連ねた文様が特徴である。後期を代表する十腰内式土器の成立を知るための重要な土器である。

弥栄平(2)式土器

6　沖附(2)式土器　沖附(2)遺跡　後期初頭
「六ヶ所村の地名がついた重要な土器」

胴部の沈線文や磨消縄文で向かい合ったコの字の「方形区画文」が特徴で、上部や下部には、縄文のみか、あるいは、文様がない無紋帯が広がる。十腰内式土器につながる重要な土器である。

沖附(2)式土器

7　小牧野３式土器　大石平遺跡　後期初頭
「方形区画文」から「入組文」の多用へ

胴部の大きな渦巻文や C の字の入組文の多用が特徴である。沖附(2)式土器や弥栄平(2)式土器に見られた三角形や四角形の方形区画から、入組文への変遷を見ることができる貴重な土器である。

小牧野３式土器

8　十腰内Ｉａ式土器　大石平遺跡　後期前葉
「十腰内式土器文化における津軽と南部の違い」

胴部の網目状の文様が特徴で、この網目の文様は、津軽地域では「沈線文」で付けられるものが多く、南部地域では「縄の押圧文」で付けられる場合が多い。縄文時代後期を代表する土器である。

津軽に多い土器　南部に多い土器

9　十腰内Ｉｂ式土器　大石平遺跡　後期前葉
「北日本を代表する十腰内式土器」

入り組んだ S 字文や C 字文などのクランク文が特徴である。北海道洞爺湖町を中心とした入江式土器のカニ鋏状の文様もつけられていて、「入江・十腰内土器様式」といわれている。津軽海峡を超えた広がりがあったことがわかる。

十腰内Ｉｂ式土器

10　四ツ石式併行土器　大石平遺跡　後期前葉
「縄文時代後期の土器だが、まだ名前がない」

十腰内Ｉｂ式土器の次に出現する土器で、単純化した入組文が特徴である。同時期の東北南部の影響を受けている四ツ石式土器に類似しているので、四ツ石式併行土器と呼ばれている。

四ツ石式併行土器